Information

小学生　中学生　高校生

中学生の55%が小学生の単元に「つまずき」あり!

小学校の学びは大切な土台です

小学校の勉強は、自の前のテストで点数を取るためだけのものではありません。

国語・算数・英語といった各教科の学びは、中学校で本格的に始まる学習を支える「基礎」として使われます。この基礎が十分に身についていないまま中学校に進むと、授業の進度についていけず、「そもそも何いパンなのか?」分からない!ついていけない」という状態が続いてしまうことが多いです。アークでも導入しているatamaの学習調査では、**「小学生の55%が小学生の単元につまずきあり!」**というデータがあります。

「えっ、そんなに多いの?」という印象ではないでしょうか。

例えば、中学校の学習では、最初に**「正の数・負の数」**を学習します。一見すると約1年前に学んだ内容なので、中1の最初で数学に対して苦手意識を持ちやすくなる、その後の学習に影響を及ぼしてしまいます。

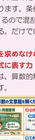
また、文章題は**「苦手力」**と**「無理手力」**が求められます。中学校では、文章題の難易度が大きくとがり、問題文が長くなります。条件も複雑になり、Xという文字がでてくるので混乱する人もでてきます。ただ計算ができる、だけでは対応が難しくなります。

「何が分っていて」「何を求めたいのか」を整理し、それを**式に表す力（立式）**が必要になります。アークでは、算数の解法で思考の手順化を指導しています。

①国語力の読解力強化
②公式・語彙の求
③立式
④工夫して計算

算数・文章題の解き方

解くための手順を段階毎に段変化させ、「何をどうすればよいか」をきちんと手順化して考える。この作業を小学生の間に確立しておくことが大切で、中学校以降の文章題への対応力を大きく高めます。



atama+は、AIであるなにを「完全解析」します。あなたの理解度、自分で考えて工夫していない弱点、ミスの傾向などを全て把握、あなた専用カリキュラムを つくります。「効果がはい学習」をしてしまう可能性、atama+には、あります。

ご興味のある方は、お気軽に教室長までご連絡ください。

11月希望校調査結果から見える動きと、受験生が今考えるべきこと

12月中旬、大阪府公立高校の11月希望校調査結果が発表されました。**昨年と比べると、低倍率が1.5倍以上の高校が多く見られ、一方で12倍を超える結果**となっています。そのため、倍率が1倍を下回る高校も少なくありません。

この結果から、公立高校の中でも人気校と考えている学校の集、いわゆる「二極化」が、ますます進んでいることが分かります。倍率を見て、「この学校は倍率が高すぎて不安」「思ったより倍率が低くて安心かも」と感じた中学生や保護者の方も多いのではいでしょうか。ただし、この11月時点の、あくまで**中間地点**の数字です。実際の入試結果とは大きく異なることも珍しくありません。

11月希望校調査の「最終結果」ではない

11月の段階では、全国模試や実力テストの結果が出て十分に出揃う、12月から2月にかけて、倍率は高校も確定していない生徒たちが多くいます。その中で、「今の成績より少し上の学校」を希望として検討しているケースも多く、倍率は実際より高めに出やすい傾向があります。

高校名	2025年の倍率			
	11月時点	11月時点	当日倍率	当日倍率
四條畷	1.59	1.59	1.16	-0.43
大手前	1.25	1.20	1.19	-0.01
東	1.71	1.45	1.38	-0.07
豊中川	1.14	0.83	1.09	-0.26
清水谷	1.41	1.13	1.20	-0.07
布施	1.30	1.21	1.07	-0.14
夕陽丘	1.19	1.36	1.21	-0.15
八尾	1.16	1.00	1.06	-0.06
花園	1.64	1.40	1.04	-0.36
緑陵町	1.06	1.16	0.88	-0.28
泰星江	1.30	0.80	1.00	-0.20
交野	0.82	0.73	0.98	+0.25

大阪府一般選抜倍率まとめ一部抜粋

昨年度（2025年度）のデータを振り返ると、11月時点で高倍率だった学校が、出願変更などを経て、当日には倍率を下げた例が多く見られました。一方で、11月時点では倍率が低かった学校が「安全」と捉えて、最終的に当日には倍率が上昇した学校も少なくありません。

このように、11月の段階で倍率に大きな差があっても、最終的には0.8～1.3倍、高いところでも1.4～1.5倍の範囲に落ち着く傾向があります。

何をどのように考えるか

図表にある通り、実際の大阪公立高校や比国高校で例年あり見られる傾向として、**「最終的には倍率が下がる」**という傾向があります。

昨年度入試における倍率が、例年と比べて低かったので、昨年度は当日高校側集合が本格的に動き出す中で、**「当日の倍率が上がる」**という傾向が見ていました。その反動、いわゆる「揺り戻し」が、本年度は11月の希望調査に大きく表れていると考えられます。

希望調査を元に受験生が最終考えること

大切なのは、受験の数学だけで一喜一憂しないことです。11月の入試結果は、あくまで「今の成績」で、「その学校の倍率が何倍か」ではなく、**自分がその学校の合格圏にいているかどうか**です。全国模試の偏差値や校内順位、内申点などと総合的に判断し、自分の立ち位置を把握することが大切です。実際に、偏差値は高めなのに、内申点が足りず、科目によっては倍率が高くてもその年度は厳しい、もし今年の倍率が例年より高くなると予想される場合には、**合格ラインに届くために上げ何点、どの教科をどれだけ伸ばす必要があるのかを**具体的に考えることが重要です。

最終的には、倍率や数字だけでなく、学校の雰囲気や通学条件、高校生活のイメージも含めて、**「納得して受けられるかどうか」**を基準に判断することが大切です。

11月希望校調査は、受験生全体の動きを知るための参考資料ではあります が、それだけで進路を決めるものではありません。正しい情報を集め、自分の状況を冷静に分析し、必要に応じて対策を立てることが、最後の合格に向けて一つなげる道です。不安を感じたときは、一人で悩まえず、教室長までいつでもご相談ください!

～大学入試英語は「量」と「速さ」の時代へ～

～5日で読む英語は約2倍～
求められるのは大きく変化!!

大学入試において、**英語はほぼすべての受験生に課される「必須科目」**です。その英語は、この約50年で大きく姿を変えてきました。全国の受験生が同一の試験を受ける「共通1次試験」が1979年に始まって以来、**様々な試験で求められる英語の量と処理能力は、飛躍的に増大しています。**

共通1次試験は1990年に「大学入試センター試験」へと改称され、多くの私立大学も参加する形となりました。そして、2021年からは「大学入学共通テスト」へと移行し、英語の出題形式はさらに大きく変化しています。

具体的に見ると、共通1次試験では、**試験時間100分で総語数は約2354語**でしたが、現在の共通テストでは試験時間が80分に短縮されたにもかかわらず、**語数は約5520語と約2.3倍に増加しています。**さらに、**センター試験は約6000語を超え、1分あたり約77.5語を処理する語力**が求められました。これは、文構造を一つ一つ理解しながら和訳する読み方では、対応が難しくなります。

実施年	試験時間	総単語数	1分あたり処理量
1979	100分	2354語	約23.5語
1980	80分	2488語	約31.1語
2020		4232語	約52.9語
2021		5381語	約67.2語
2024		6233語	約77.5語
2025		5520語	69語

出題語数が増えた、出題内容も大きく変化しています。現在の共通テストでは、ほぼすべての長文問題が、会話文、グラフや表を読み取り情報を整理する問題、メールや案内文を読んで要点を把握する問題など、**実社会を意識した実践的・実用的な内容**が中心です。共通テストでは、求められているのは、「頭の中で和訳する」ことではなく、**「英語を英語のまま素早く理解し、必要な情報を取捨選択して解答に結びつける力」**です。

こうした入試の変化は、グローバル化が進む日本社会のニーズを反映したものとも言えます。それに対して、大学入試センターとどの大学、中高・高校、公立には**小学校段階の英語教育にも入れて**います。

現在では、**小学校高学年で600～700語、中学校で1200～1600語**（多い場合は1700語程度）、**高校で2000語程度**、**大学入試では約1800～2500語程度**の語彙に触れることが求められています。これは30年前と比べると、高校受験までに学習英語量が**最大約2倍に増加**していることを意味します。

大学入試に向けた準備!!

このような状況を踏まえると、**大学入試対策は高校2・3年から始めればよい、という考え方はすでに現実的ではなくなりました。**大学受験に向けた対策においては、長文を大量に処理する読解力や速読力や語彙の深掘りが求められる、その工台となる**語彙力・文法力・英文を英語のまま読む習慣**は、高校1年生段階で育てておくべき要素です。

早期にこそ計画的な入試に向けた受験計画と志望大学の選択・決定が、合格をより現実のものとすることができます。

アーク進学会